

人と人とのふれあい・認め合い

～養護学校のボランティア講座と高等学校の「連携」～

養護学校での体験を単位として認定

都立盲・ろう・養護学校では、障害のある人への理解をすすめるために、公開講座として「ボランティア講座」を実施しています。

養護学校で実施しているこのボランティア講座に、高校生が参加して、その受講時間・活動に応じて学校外の学修として単位を認定する、新たな「評価」のしくみを導入している都立学校がいくつかあります。都立農業高校、都立多摩高校もそうした学校の一つです。

都立府中朝日養護学校と都立農業高校、都立あきる野学園養護学校と都立多摩高校は、それぞれの学校の特色を生かした学校間の連携を行っています。その取り組みの中に生徒たちの学校外の学修の単位認定があります。

ここでは、都立多摩高校の生徒が、都立あきる野学園養護学校のボランティア講座に参加した様子を報告するとともに、高校生たちの体験学習について考えます。



「心のバリアー」がとけていく

都立あきる野学園養護学校では、学校開放事業の一環として、都民を対象とした「ボランティア実践講座」を毎年開催しています。

この講座は、障害者への理解や知的障害児・肢体不自由児とのレクリエーション活動など、講義と体験を取り入れた計30時間(初級15時間、中級15時間)です。土曜日や夏休みに実施しています。この講座に、都立多摩高校の学校設定科目「社会福祉入門」を受講する生徒や講座内容に関心を持った生徒たちが参加しています。講座以外にも、養護学校の生徒たちへの支援活動にも携わり、トータル35時間を超えた生徒について、都立多摩高校がレポート提出などを経て評価し、単位を与えるというものです。

講座の中では、水遊びやスタンプラリーなどレクリエーション活動の援助、トイレや食事の介助などを体験します。「講座に参加する高校生たちは、なにかしてあげたいと思うやさしい気持ちは持っていますが、実際に障害のある小・中学生や同世代の高等部の生徒たちと接するとたいへん戸惑う」と、ボランティア実践講座を担当する都立あきる野学園養護学校の先生は言います。食事介助体験の時、ヨーグルトをスプーンで食べさせてあげていたら、子どもが急に泣き出して、「どうしていいかわからない!!」とおろおろする高校生に、先生はていねいに語りかけていくのだそうです。「あなたが悪いわけじゃない。『どうしたの?』って聞いてあげればいいんだよ」と。

「接し方」ではなくて、“人を認める”気持ちが大事であると高校生たちが理解したとき、「心のバリアー」はとけていくのかもしれない。

私も養護学校の先生になりたい!

「私の中の『障害者イメージ』が変わりました」と、参加した高校生は、感想文の中で振り返っています。「彼らの笑顔で勇気づけられ、励まされた。だから、今までつづけてこれたんだと思う。そして、これからも続けていきたい」。さらに、高校生たちは、この講座での体験を通して、自分の将来をも考えるようになっていきます。養護学校の先生になりたい、福祉の仕事がしたい、保育士になりたい、ヘルパーの資格をとりたい…。

「ボランティア実践講座」の受講者は、中高年の女性や退職した男性が中心です。そうした大人の受講者が、参加している高校生たちをまるで「孫」のように、あたたかく見守る雰囲気の中で、講座は進みます。短い期間での高校生の成長ぶりが、大人たちの学ぶ意欲を刺激するのでしょうか、講座終了後もボランティアサークルに所属し、PTA主催の地域活動や「夏まつり」などに、積極的に協力する人たちが多くいます。

出会う場をつくること

「障害のある生徒たちの地域活動を豊かにしていくためには、支援者をたくさん増やしていくことが大事だと思います。そのために、このボランティア実践講座は、年齢や障害のあるなしを越えて大切な出会いの場になっています。そして、養護学校の生徒たちと同世代の高校生が参加してくれることで、若い人たちの間にお互いを認め合う関係が芽生えてくれると思うのです」と、都立あきる野学園養護学校の担当の先生は語ります。

また生徒を送り出す側である都立多摩高校の担当の先生は、「生徒たちは自分が認められることにより自信がつき、その自信が活動につながり、人を思いやる気持ちが育っていく」と言います。都立あきる野学園養護学校のボランティア実践講座は、学校間の連携によって、高校生たちの貴重な体験学習の場になっています。

